

幼児期の輝きと揺らぎ

津守 真

四歳のS子が、前晚私共の家に電話をかけてきたとき、「あしたはじいちゃんうちにいくからね」と弾んだ声で言った。翌日、心待ちにしていたとき、電話があり、「おそくなつてごめんね」と言った。私は、四歳の子がこんなに相手のことに気を使うことに感心した。母親が、いざ出かけようというときになって、下の子が風邪をひいているし、家のことも気になって、心に迷いを生じたらしかった。それから更に二時間程して、やっぱり今日は来るのをやめたと母親から電話があった。私は、あんなに心を浮き浮きさせて楽しみにしていたS子の落胆が目に見えるような気がして、考え直して出かけてくるようにす

すめた。するとS子が電話に出てきて、「いけなくてごめんね」と言った。

母親の話によると、大人の気持ちの迷いが子どもに映ったこともあるが、あと一週間で幼稚園に入園するという緊張感や不安が子どもの側にもあるらしいとのことだった。電話のあと、S子は持っている人形を全部出してきて、並べて遊んでいたとのことであった。大勢の未知の子ども達が集まる幼稚園のことを心に思い描いて、人形を動かしながら何かを考えているらしかった。私は、いつも私共の家にくるときのように何もかも忘れて遊んでしまっていたのだろうか、手放して祖父母の家遊びにこられない、子どもの心境を察していじらしく思った。その小さな世界の中で、子どもがその日を過ごし易いようにと、その代わりに絵本を買って上げたり、会社の帰りにケーキを買って来るといふ心の慰めをつくってあげる若い両親の心遣いにも、子の親になった者の成長が見えて心強く思った。

子どもの世界の中に起こる葛藤や不安、たのしみやためらいなど、子どもが生きる上で避けられないことである。それは大人にも共通のものであるが故に、大人に共感もできない。また、大人のように度を越えた欲望や損得にかならない、大人からみればささやかな、つましい悩みや喜びであることに、私共の心を惹きつけるものがある。それをたいせつに思うし、それを踏みにじるような大人の勝手さに出会うと、子どものために何とか力になりたいと思う。幼児と交わるとき、私共はいろいろのところでこういう経験をする。

三月の末、私共の学校の幼児のクラスから、他の小学校にゆくことになったR子は、最終日の親子一緒に会食の日、母親が部屋に入ってきた途端に大声で泣いて家に帰る支度をはじめた。これから母親たちが持ち寄った特別の昼食がはじまろうとするのに、部屋中にひびく泣き声を上げ、母親の手を引いて帰っていった。この日が最後の日であることをR子は承知していたようで、午前中、私との間でいつもやってきた遊び、滑り台を一緒に滑ってひっくり返って笑うことや、食べ物絵本の絵本をみて食べる真似をして笑うなど、一通り全部やった。帰るときの泣きわめきは、別れに伴うさまざまな葛藤を内に含んでいるように思えて、私の心を痛くした。

この一、二年、私は幼児のクラスで過ごすことが多かった。三学期の保育も終わろうとする頃、S夫は、机の上にジュースのびんが数本あるのを見つけた。彼はホールにとんでいて、赤色の容器を持ってきた。底に粘土が沈殿している。S夫はそこにジュースを入れてかきませた。あつという間のことで、大人たちは、ジュースが飲めなくなってもったいないと言った。S夫は更にポットからお茶を注ぎかきませた。この子にとってはジュースは飲むものではなく、いろんな液を一緒にしてかきませるための材料であった。ひとつのことを思いつめると、そのことだけの世界に入ってしまうこの子どもにとって、異質な

液をまぜる遊びをはじめたことは、この子なりの心のひろがりを示すものと私には思えた。このあと、S夫は流しでえのぐをかきませたりして、長い間余念なくこの遊びをつづけた。どうしたら、自分の心の中に異質な人や物を受け入れられるか、子どもはこうした遊びの中でいろいろいとためし、自分なりの解決を見つけようとする。傍にいた母親は、普段からS夫はジュースを飲まないことを知っていた。そして液をかきませるこの遊びを、この子に大切な行為と見る私共の見方に共感を示した。数日後、S夫は庭のブランコで、私の膝に座り、身体を私にびったり寄せ、顔をつけて長い時間過ごした。他の子も一緒にブランコにのっていたり、こんな風に私に抱かれたのははじめてのことだった。突然、ママどこ、ママと代わってと大声で泣いて母親をよんだ。ここにも子ども心の葛藤があるように思えた。

幼児の心にふれて、大人の心が痛むこともある。また、ほのぼのとした温かさを覚えることもある。それに気付かないで通り過ぎてしまうこともある。幼児のクラスにいると、その両方のときがある。

幼児期は、人間の一生涯の中でも特別な時期である。幼児と交わるときには、大人もまた幼児期の感性にひきもどされる。幼児期の感性は、人間の心の底辺をつくっているのに、意識的な記憶に残らないので、大人の意識的な論理によって潰されやすくもある。私

共の世界がいつも幼児を一緒に含んでいるかぎり、幼児の心にこたえる感性と行動力は、
大人の世界から失せてはならないものであると思う。

(愛育養護学校)

